
講 評

三菱UFJリサーチ&コンサルティング理事長 中谷 巖

今回で3回目となる当社懸賞論文では、わが国がかかえる重要な課題であり、当社でも注力しているテーマのひとつである「国と地方のあり方」を取り上げた。全国の大学院生、大学生からビジョンやアイデアを募ったところ、さまざまな観点からの多様な意見が寄せられた。ご応募いただいた皆さんに敬意を表するとともに感謝申し上げたい。

今回の懸賞論文の審査は、これまでと同様、まず当社研究員による1次審査で絞りこみをし、その後、外部審査員の先生方を交えた最終選考で各賞を決定するという二段階の体制で行った。1次審査は、当社で実際に地方自治体の公共経営のあり方などの研究に従事しているパブリック・マネジメント推進室のメンバーが担当した。2次審査（最終選考）では、社外から大住荘四郎先生（関東学院大学経済学部）、田中啓先生（静岡文化芸術大学文化政策学部）、長峯純一先生（関西学院大学総合政策学部）のお三方に審査に加わってもらい貴重なご意見をいただいた。当社からは、1次審査の取りまとめ役を担当した荒川潤主任研究員（公共経営・地域政策部）と中谷が参加した。

上記メンバーによる厳正な審査の結果、残念ながら大賞は該当なしとなったが、優秀賞3作品、佳作4作品が選出された。以下、各受賞作品について簡単なコメントを付しておく。

まず優秀賞の3作品であるが、田中俊徳さん「自然保護行政から考える新しい政治 ～舵取り、政策統合、ガバナンス～」は、国立公園や世界遺産における自然保護行政を考察対象として、地方が自立できる持続可能な産業構造の転換について検討した論文で、分析の一般化が不十分との声もあったものの、興味深いテーマ選定と論点が上手くまとめられている点が評価された。

三浦瑠麗さん「グローバル化の中の道州制」は、自立的な経済圏としての道州制を、加速するグローバル化に対する有力な処方箋として位置づけた論文で、「アイデアに斬新さが欠けるとの声もあったが、明快な論旨の展開、文章の構成力が評価された。

村尾雄一郎さん「地方制度における「行政」と「自治」の分離」は、政治・行政システムを従来のトップダウン型から基礎自治体を中心とするボトムアップ型に変換するために、「地方行政制度」と「地方自治制度」の分離を提案した論文であり、実現可能性に疑問があるものの、視点の斬新さが高く評価された。

次に佳作の4作品についてであるが、朝倉健太さん「事業別予算が変える地方議会の監視機能について ～兵庫県川西市議会における事例から～」は、監視機関としての議会の改革案として、事業別予算による予算・決算改革を提案した論文であり、兵庫県川西市の事例を用いた説明は、事例調査を行ったことへのプラス評価と、掘り下げ不足とのマイナス評価の両論があったが、全体的なまとまりのよさが評価された。

鬼沢啓さん「意志ある地域・声ある地方 ～市民性が支える「国と地方」の議論～」は、「学童保育とデイケアの融合」と「高齢者による保育所の運営」をモデルとして、地方の声のくみ上げの実践を主張した論文で、論文構成のバランスの悪さが指摘されたが、テーマ設定が本懸賞論文の趣旨に最もかなっていた点や内容の手堅さが評価された。

神田文さん、湯浅孝康さん、宗高有吾さんによる「わが国における「国と地方の協議の場」の新しいカタチ～「比較政策論」からの検討～」は、諸外国の「国と地方の協議の場」の在り様に焦点をあてて、分権改革の政策結果や政策パフォーマンスの相違を検討したうえで、わが国の国と地方のあり方を検討した論文で、興味深い具体例の紹介と「国と地方の協議」という視点からまとめたユニークさが評価された。

武藤淳さん「新しい道州制 ～「地域主権」実現のために～」は、「道州」と「市町村」の「二層制」ではなく、「道州」、「府県」、「市町村」の「三層制」による「道州制」の優位性を主張した論文で、わが国であまり取り上げられない「三層制」の議論を取り上げた点が評価された。

以上が今回の懸賞論文受賞作の簡単な紹介であるが、いずれも短い募集期間の中でよくまとめあげられた力作揃いである。優秀賞作品は、本誌に論文が掲載されているが、佳作受賞作についても、当社HP (<http://www.murc.jp/>) にて閲覧可能である。多くの方々がこれらの論文に目を通され、国と地方のありかたについての考えを深めていただければ、この懸賞論文にたずさわったものとしてうれしい限りである。